

氏名	水川 翔
授与した学位	博士
専攻分野の名称	医学
学位授与番号	博甲第 5790 号
学位授与の日付	平成30年6月30日
学位授与の要件	医歯薬学総合研究科 病態制御科学専攻 (学位規則第4条第1項該当)

学位論文題目	Endoscopic balloon dilatation for benign hepaticojejunostomy anastomotic stricture using short double-balloon enteroscopy in patients with a prior Whipple's procedure: a retrospective study (膵頭十二指腸切除後の良性胆管空腸吻合部狭窄に対するダブルバルーン内視鏡を用いた吻合部バルーン拡張術に関する後ろ向き観察研究)
--------	---

論文審査委員	教授 藤原俊義	教授 八木孝仁	教授 野田卓男
--------	---------	---------	---------

学位論文内容の要旨

膵頭十二指腸切除 (PD) 後の良性胆管空腸吻合部狭窄 (HJAS) は、時に起こりうる偶発症である。近年、HJAS に対するダブルバルーン内視鏡 (DBE) による治療が行われてきおり、今回我々は PD 後の良性 HJAS に対する DBE を用いた内視鏡的吻合部バルーン拡張術について検討をおこなった。対象は、2008 年 12 月から 2014 年 12 月に当院にて、PD 後の HJAS に対し、DBE にて内視鏡的吻合部バルーン拡張術を施行した 46 例であり、治療成績としては、吻合部到達率、処置成功率は共に 100% であり、全例で処置に成功した。偶発症は保存的加療で回復する胆管炎を 3 例 (7%) で認めたのみであった。観察期間中央値 3.5 (0.01-8.1) 年で、1 年以上経過が追えた 42 例の内、24 例 (57%) で、HJAS 再発を認めた。再発期間中央値は、379 (17-2230) 日であり、吻合部開存率 (1/2/3 年) は、73% (95%CI, 58-84)、55% (95%CI, 39-69)、49% (95%CI, 32-63) であった。再発症例でも全症例で内視鏡的処置にて治療が可能であった。再発に関する危険因子としては、単変量解析では、早期狭窄症例 (365 日以内) が、再発因子であった ($P=0.043$) が、 P 値が 0.2 以下の因子 (性別、総胆管径、早期再発症例、胆汁漏有無) について、多変量解析を行ったところ、有意な再発因子は認めなかった。

論文審査結果の要旨

本研究は、膵頭十二指腸切除後の良性胆管空腸吻合部狭窄に対して、ダブルバルーン内視鏡 (Double-balloon endoscopy; DBE) を用いた内視鏡的吻合部バルーン拡張術の有用性を検証した後方視的観察研究である。

DBE による内視鏡的吻合部バルーン拡張術を施行した症例は 46 例であり、吻合部到達率、処置成功率は 100% であり、合併症は保存的加療で回復した胆管炎 3 例 (7%) のみであった。1 年以上経過が追えた 42 例中 24 例 (57%) で吻合部狭窄の再発を認めたが、全例内視鏡的処置による治療が可能であった。再発に関する危険因子の解析では、単変量解析では早期狭窄症例が再発因子となったが、多変量解析では有意な因子は同定できなかった。

委員からは、吻合部狭窄にステント留置を併用することで長期の良好な予後が得られることから、本研究で除外したステント留置の 6 例も含めて考察すべきとの指摘があった。本研究者は、新たに 6 例のステント留置併用症例に関して解析を行い、その理由と長期予後に関する検討を追加レポートとして提出した。

本研究は、DBE を用いた内視鏡的吻合部バルーン拡張術が膵頭十二指腸切除後の良性胆管空腸吻合部狭窄に有用であり、ステント留置併用も含めた検討が意義あることを示した点で、重要な知見を得たものとして価値ある業績であると認める。

よって、本研究者は博士 (医学) の学位を得る資格があると認める。